



The University of Human Environments Academic Repository

学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 13 号
学 位 記 番 号	看博第 13 号
氏 名	伊神 美早
授 与 年 月 日	令和 2 年 9 月 15 日
学 位 論 文 題 目	患者-看護学生関係自己評価尺度の作成と 信頼性・妥当性の検討
審 査 委 員	主査：篠崎 恵美子 副査：倉田 節子、巽 あさみ

論文内容の要旨

I. 研究の背景

岩井ら(2006)は、「看護において患者－看護師間に良好な人間関係を築くことが良質な看護を提供できる条件である」と述べており、看護とは、患者－看護師間の人間関係とそのプロセスを意味すると考えられる。しかし、良好な患者－看護学生関係とは何か、明確に定義されているものは見つけることはできない。

日本看護系大学協議会(2012)「大学卒業時到達度の評価手法開発のための調査研究報告書」において、卒業時到達目標の達成に対する教員の期待と学生の到達状況の認識についての報告では、援助的関係形成の過程を理解し、援助的関係を形成できるという項目については教員の期待も低く、学生の到達状況でも認識が低いことが報告されている。

先行研究からは、患者と看護師の関係についての尺度開発はされていたが、患者－看護学生関係を形成する能力を客観的に測定するものは、日本国内で見つけることはできなかった。国外では、Dearing(2010)らが開発した対人関係尺度(Self- Assessment of the Interpersonal Relationship Scale, 以下 SAIRS)があった。SAIRS は米国で開発された対象と看護学生の関係を評価する尺度であり、対人コンピテンシーを評価するために開発されたものである。この尺度は、学生が対人関係の自己評価に役立てることが出来ると考えられるが、日本と米国では看護基礎教育や文化的背景に違いがあり、SAIRS が日本の看護学生に使用できるか検討する必要がある。

II. 研究目的

本研究の目的は、臨地実習において良好な患者－看護学生関係を形成する能力を評価する尺度を開発することである。その為、第1研究として「Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版(SAIRS-J)」を作成し、第2研究として日本の看護学生にも理解しやすい良好な患者－看護学生関係を形成する能力を評価する尺度を作成する。

III. 第1研究「Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版(SAIRS-J)の作成」

1. 研究目的

Dearing(2010)らが開発した SAIRS をもとに、日本版 SAIRS-J を作成することを目的とした。

2. 研究方法

1) 尺度翻訳

稲田(2015)による尺度翻訳に関する基本指針で解説されている ISPOR (International Society for Pharmacoeconomics and Outcomes Research) タスクフォースによるガイドラインに従って推奨される 10 の手続きに従って次の手順で翻訳を行った。

2) SAIRS 日本版の作成

翻訳した尺度を「日本語版 SAIRS」とし、質問紙調査を実施した。無記名自記式で、質問紙の提出をもって同意が得られたとした。

3) 調査対象

認知デブリーフィング調査対象者は、看護系大学 1 校の学生 10 名とした。SAIRS 日本版調査の対象者は、看護系大学 1 校に依頼し、初めての基礎看護学実習が終了した 1 年生から、統合看護学実習を終了した 4 年生までの学生とした。

4) 分析方法

統計処理には SPSS Ver. 26 と Amos Ver. 26 を使用した。項目分析を行い、信頼性の検討は、探索的因子分析により抽出された因子の Cronbach' s α 係数とした。構成概念妥当性については、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）。モデルにデータが合致するか検討するために、確証的因子分析を行った。

4. 結果

認知デブリーフィングでは、SAIRS 原版は、全項目“client”という単語を使用し、これを「看護の対象」と翻訳していたが、「患者」のほうが分かりやすいとの意見が多かった。“client”という単語を全項目「患者（家族）」と修正し、内容が妥当か原版の著者へ確認を行い、等価性が確認された。翻訳後の質問紙を「日本語版 SAIRS」とした。

SAIRS 日本版(SAIRS-J)の調査では、159 部回答が得られた（有効回答率 35.4%）。各因子の Cronbach' s α 係数は.83～.88 であり、尺度全体では.92 であった。探索的因子分析では、スクリープロットの結果から 3 因子構造とみなして、因子負荷量が.35 未満の項目、二重負荷のある項目を除外基準とした。因子負荷量の低かった 6 項目と 2 重負荷のあった 2 項目を削除し、再度因子分析を行い最終的に 23 項目を採用した。

第 1 因子は＜患者の問題解決に必要な基礎的スキル＞、第 2 因子は＜患者との対人的な

プロセスに関わる心構え＞、第3因子は＜患者の意思決定を支援する基礎的スキル＞と命名した。この3因子23項目からなる質問項目を、Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版(以下 SAIRS-J) とした。

確証的因子分析では、3因子モデルとした場合の適合性は、 $GFI=.791$, $AGFI=.746$, $CFI=.837$, $RMSEA=.086$ であった。

IV. 第2研究「患者－看護学生関係自己評価尺度の作成」

1. 研究目的

患者－看護学生関係自己評価尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

2. 研究方法

1) 患者－看護学生関係自己評価予備尺度の作成

SAIRS-J 作成時の因子分析の段階で削除した項目を再度検討し、更に先行研究から新たに項目を追加し、Content Validity Index (以下 CVI とする) で調査を行った。

2) 患者－看護学生関係自己評価尺度の信頼性・妥当性の検討

作成した尺度を「患者－看護学生関係自己評価予備尺度」とし、看護系大学5校で質問紙調査を実施した。無記名自記式で、質問紙の提出をもって同意が得られたとした。

3) 調査対象

CVI 調査では、A 県内の大学院の教員5名と博士後期課程の院生5名とした。質問紙調査では、看護系大学5校の1～4年生とした。

4) 分析方法

予備尺度は、項目ごとの Item-CVI は.78 以上を妥当性があるとした。統計処理には SPSS Ver. 26 と Amos Ver. 26 を使用した。項目分析を行い、信頼性の検討は、探索的因子分析により抽出された因子の Cronbach's α 係数とした。構成概念妥当性については、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)。モデルにデータが合致するか検討するために、確証的因子分析を行った。基準関連妥当性の検討では、「看護における社会的スキル尺度短縮版」の下位尺度ごとの合計得点との Spearman の順位相関係数を算出した。再テスト法では、1回目の尺度の合計得点と2回目の合計得点の Spearman の順位相関係数を算出した。

3. 倫理的配慮

第 1, 2 研究共に調査への協力は自由意思であり, 成績や業務には一切関係なく, 不利益は何もないことを依頼文書に明記し, 口頭でも説明を行った. 調査の途中で中断したくなったらいつでも辞めることができ, 回答したくないことは回答しなくてもよいことが保証されていることを依頼文書に明記した. 本研究は, 人間環境大学倫理審査委員会の承認を受け実施した.

V. 研究の新規性・独自性・社会的価値

現在のところ国内には, 患者－看護学生関係の形成を評価する尺度はない. その為, SAIRS-J を作成し, さらにこれを改良し, 患者－看護学生関係自己評価尺度を作成することは新規性と独自性がある. 本尺度を活用することにより, 学生は自分自身の行動や態度を自己評価し, それに基づいて自分自身の状況を確認して行動の改善や, 調整をすることができるため社会的価値があると考ええる.

VI. 結果

CVI 調査 1 回目で, Item-CVI が .78 に満たなかった項目の内容の統合と, 表現の修正を行い, 29 項目を選出した. 2 回目の調査で, 項目すべてにおいて基準を満たしたため, これを患者－看護学生関係自己評価予備尺度とした.

1 回目の質問紙調査では, 患者－看護学生関係自己評価尺度 447 部 (有効回答率 27.5%), 看護における社会的スキル尺度短縮版 409 部 (有効回答率 25.2%). 2 回目の調査では 21 部 (有効回答率 11.7%) を分析対象とした. 探索的因子分析では, スクリーンプロットの結果から 3 因子構造とみなして, 因子負荷量が .35 未満の項目を削除しながら因子分析を繰り返し行った. 結果, 3 因子 22 項目が抽出された. 第 1 因子は<対象との対人的なプロセスに関わる心構え>, 第 2 因子は<対象の問題解決に必要な基礎的スキル>, 第 3 因子は<対象との関係成立に必要なコミュニケーションスキル>と命名した. 各因子の Cronbach's α 係数は .81～.87 であった. 確証的因子分析では, GFI=.860, AGFI=.828, CFI=.871, RMSEA=.078 であった. 再テスト法における相関係数は $\rho=.66$ ($p<.01$) であった.

VII. 考察

1) 尺度翻訳

“client”という単語を「看護の対象」と翻訳を行ったが、これについても分かりにくいと学生より指摘があり、最終的には「患者（家族）」と翻訳を行った。尺度の原作者より許可を得たが、実質的な意味の変化が伴う場合、注意深い翻訳が必要であると考えられた。

2) SAIRS 日本版 (SAIRS-J) の作成

各因子の Cronbach's α 係数は.83～.88、項目全体では.92であり、内的整合性は概ね確保していると判断した。3因子でのモデル適合度は、GFI は.791、AGFI は.746であった。基準値よりは低い。GFI > AGFI の基準は満たしていた。また CFI は.837であり基準値.9よりはやや低い結果となった。RMSEA は.086であり基準値.08未満よりは高かったが.1以上であてはまりが悪いとされるには至らなかった。基準を概ね満たしていることが示されたが、尺度の精錬には課題が残ることが示された。

3) 患者－看護学生関係自己評価尺度の信頼性・妥当性

各因子の Cronbach's α 係数は.81～.86、項目全体では.92であり、内的整合性は概ね確保していると判断した。また、再テストにおける相関係数は $\rho = .66$ ($p < .01$)であり、対象者は少なかったが、概ね安定性も確認できたと考える。確証的因子分析において、モデル適合度の基準を概ね満たしていることから、3因子構造が妥当であると考えた。基準関連妥当性では、「患者－看護学生関係自己評価尺度」の下位尺度と「看護における社会的スキル尺度短縮版」下位尺度と有意な正の相関がみられ、本尺度の妥当性が示された。

VIII. 研究の限界と課題

本尺度は概ね信頼性と妥当性が確保され、患者－看護学生関係の自己評価に貢献できると考える。しかし、調査票の回収率が低かったことや、1つの項目が複数の因子に高い負荷量を示す項目があったこと、確証的因子分析において、基準値より低い項目があったことから、引き続き信頼性と妥当性の検証を進めていくことが必要である。今後の課題として、本尺度は米国で開発された尺度を基にしているため、日本の看護基礎教育に必要な内容が抽出されているか、日本の看護学生が実際に活用できる尺度であるか、更に検討を進めたいと考える。

IX. 結論

1. 患者－看護学生関係自己評価尺度の信頼性、妥当性が示された。
2. 良好な患者－看護学生関係には、第1因子＜対象との対人的なプロセスに関わる心構え

＞，第 2 因子＜対象の問題解決に必要な基礎的スキル＞，第 3 因子＜対象との関係成立に必要なコミュニケーションスキル＞という 3 つの共通因子が見いだされた．

論文審査の結果の要旨

本論文は、臨地実習において良好な患者－看護学生関係を形成する能力を評価する尺度を開発について報告するものである。第1研究として「Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版 (SAIRS-J)」を作成し、第2研究として日本の看護学生にも理解しやすい良好な患者－看護学生関係を形成する能力を評価する尺度を作成した。現在のところ国内には、患者－看護学生関係の形成を評価する尺度はない。SAIRS-J を作成した後、それを改良し、患者－看護学生関係自己評価尺度を作成することは新規性と独自性 がある。開発された本尺度を活用することにより、学生は自分自身の行動や態度を自己評価し、それに基づいて自分自身の状況を確認して行動の改善や、調整をすることができるため社会的価値がある。また、本論文が米国で作成された尺度をもとに「Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版 (SAIRS J)」を作成する第1次研究から、日本の看護学生にも理解しやすい良好な患者－看護学生関係を形成する能力 評価の尺度を作成した第2次研究まで、丁寧なプロセスを経ていることは、博士論文として評価できる。

第1次研究では、Dearing (2010)らが開発した SAIRS をもとに、日本版 SAIRS-J を作成することを目的とし、稲田 (2015)による尺度翻訳に関する基本指針で解説されている ISPOR(International Society for Pharmacoeconomics and Outcomes Research) タスクフォースによるガイドラインに従って推奨される10の手続きに従って翻訳を行った。〈患者の問題解決に必要な基礎的スキル〉〈患者との対人的なプロセスに関わる心構え〉〈患者の意思決定を支援する基礎的スキル〉の3因子23項目からなる質問項目を、Self-Assessment of the Interpersonal Relationship Scale 日本版(SAIRS-J)とした。確証的因子分析で、3因子モデルとした場合の適合性は、GFI=.791、AGFI=.746、CFI=.837、RMSEA=.086 であった。

第2次研究では、患者－看護学生関係自己評価尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。患者－看護学生関係自己評価予備尺度の作成し、A県内の大学院教員5名と博士後期課程の院生5名を対象とし、Content Validity Index を調査した。次に、患者－看護学生関係自己評価尺度の信頼性・妥当性の検討として、看護系大学5校で調査を実施し、各因子のCronbach's α 係数は、.81～.86、項目全体では.92 であり、内的整合性は 概ね確保していると判断した。また再テストにおける相関係数は $r=.66(p<.01)$ であり概ね安定性も確認できた。確証的因子分析において、GFI=.8601、AGFI=.828、CFI=.8707、RMSEA=.078 であった。モデル適合度の基準を概ね満たしていることから、3因子構造が妥当であると考えた。基準関連妥当性では、「患者－看護学生関係自己評価尺度」の下位尺度と「看護における社会的スキル尺度短縮版」下位尺度と有意な正の相関がみられ、本尺度の妥当性が示された。良好な患者－看護学生関係には、第1因子〈対象との対人的なプロセスに関わる心構え〉第2因子〈対象の問題解決に必要な基礎的スキル〉第3因子〈対象との関係成立に必要なコミュニケーションスキル〉という3つの共通因子が見いだされた。

博士前期・後期課程の研究のすべての過程において、良好な患者-看護学生関係とは何かというテーマについて、誠実に取り組んでいた姿勢は高く評価できる。今後、対象者数を増やすことや、実際に教育に活用することをおし て、さらに追及することを期待する。

本論文の一部は、22nd East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS) 2019 にて報告した。SAIRS-J については日 本看護医療学会誌、患者-看護学生関係自己評価尺度については日本ヒューマンヘルスケア学会誌に掲載された。

令和2年 6月 30日

論文審査委員	主査	教授	篠崎 恵美子
	副査	教授	倉田 節子
	副査	教授	巽 あさみ